

# スポーツボランティア・リーダー養成研修会 テキスト

## 目次

<b>第1章 概論 スポーツボランティア／スポーツボランティア・リーダーとは</b>	
1 スポーツボランティアの定義	1
1-1 ボランティアの定義	
1-2 スポーツの定義	
1-3 スポーツボランティアの定義	
1-4 チームの定義	
1-5 リーダーの定義	
2 スポーツボランティアについて	3
2-1 スポーツボランティアの楽しみ方	
2-2 仲間づくりと仲間の受け入れ方	
3 スポーツボランティア・リーダーに求められるもの	4
3-1 リーダーの心得	
3-2 リーダーの立場と役割	
4 スポーツボランティアの現状把握と課題	5
4-1 スポーツボランティア活動状況	
4-2 スポーツボランティアバンクの課題	
5 スポーツボランティア仲間との付き合い方	7
5-1 スポーツボランティア活動とは	
5-2 他のスポーツボランティア活動仲間とのコミュニケーション	
5-3 障害者とスポーツボランティア	
<b>第2章 理論 スポーツボランティアに関する社会状況</b>	
1 スポーツボランティアの統計	8
1-1 データで見るスポーツボランティア	
1-2 スポーツライフ（する・みる・ささえる）の現状で見ると	
2 スポーツボランティアの分類と様々な活動	10
2-1 スポーツボランティアの分類	
2-2 スポーツボランティアの活動紹介	
3 障害のある人のスポーツ	12
3-1 ダイバーシティとは	
3-2 スポーツボランティアにおけるダイバーシティ	
3-3 障害者スポーツの起源	
3-4 障害者スポーツの可能性	
3-5 障害者スポーツの国際大会	

4	スポーツボランティアの現状	17
4-1	スポーツに関する法律等の流れ	
4-2	スポーツ基本計画とスポーツボランティア	
5	リーダーシップ	18
5-1	リーダーシップとは	
5-2	ボランティアのリーダーシップ	
5-3	フォロワーシップとは	
<b>第3章 実践 コミュニケーションスキル</b>		
1	アイスブレイク	20
1-1	はじめに	
1-2	心地よい空間を創り出すために	
1-3	グループワーク	
1-4	リーダーとアイスブレイク	
2	リスクマネジメント	22
2-1	リスクとは	
2-2	スポーツボランティアにおけるリスク	
2-3	リスク予測能力	
2-4	備えておきたい対応方法	
2-5	応急手当を身に付けておくことの大切さ	
2-6	保険について	
2-7	具体的なリスク軽減	
<b>第4章 資料 日本スポーツボランティアネットワーク (JSVN)</b>		
1	活動について	28
1-1	設立意義と目的	
2	主な事業	30
2-1	3つの事業	
2-2	スポーツボランティア養成事業	
2-3	コーディネート事業	
2-4	スポーツボランティア周知・啓発活動	
3	スポーツボランティア養成プログラムの概要	32
3-1	講習会概要	
3-2	更新講習概要	
3-3	講師・指導者制度概要	

# スポーツボランティア/スポーツボランティア・リーダーとは

## 1 スポーツボランティアの定義

### 1-1 ボランティアの定義

ボランティアとは、自主的に社会活動等に参加する人や活動のことである。ボランティア活動は、「自主（自発）性、公益（社会、公共）性、無償性」に基づく活動とされる。今日では、これらに「先駆（先見、創造、開拓）性」を加えて4原則とすることが多い。さらに、日本の研究者によっては、一過性でなく継続的に活動を行うという意味で「継続性」も加えて、5原則としている。

（日本スポーツボランティア学会「スポーツボランティアハンドブック」2008）

英語のボランティア（volunteer）の語源は「志願兵」であり、現在も本来の語義通り「志願兵」や「義勇兵」の意味でも使われている（対義語はdraft：「徴集兵」）。歴史的には、騎士団や十字軍などの宗教的意味を持つ団体にまで遡ることができ、ラテン語のvolo（ウォロ：「意思、決意、願望」の意味を持つ英語willの語源）に関係するといわれている。

なお、ボランタリー（voluntary）とは、「自発的であるさま」のことである。

### 1-2 スポーツの定義

スポーツとは、“名辞（めいじ）であるが物的存在ではない”（名辞：言語によって表現された概念のこと）と説明されることがある。あるいは、“その言葉（スポーツ）は存在のない現象である”、“競技スポーツ種目の総称である”などとも表現される。

Verlag Karl Hofmannによる辞書“Dictionary of Sport Science”では、スポーツについて次のように説明している。

「スポーツの正確な定義はできない。それは、話し言葉の持つ意味が多岐にわたっているからである。スポーツという言葉は、その境界が科学的な分析がなされ、はっきり決められている訳ではない。」

英語のスポーツ（sport,sports）の語源は、「日々の生活から離れる」という意味のラテン語 deportare だと言われ、「気晴らし」「休養する」「遊ぶ」などをさす言葉であった。また現在は、チェスやダーツ、キャンプ活動等も「スポーツ」に含まれる。

### 1-3 スポーツボランティアの定義

スポーツボランティアの定義としては、以下のようなものがある。

「スポーツという文化の発展のために金銭的報酬を期待することなく、自ら進んでスポーツ活動を支援する人（活動）のこと」  
(日本スポーツボランティア・アソシエーション2004)

「地域におけるスポーツクラブやスポーツ団体において、報酬を目的としないで、クラブ・団体の運営や指導活動を日常的に支えたり、また、国際競技大会や地域スポーツ大会などにおいて、専門的能力や時間などを進んで提供し、大会の運営を支える人のこと」

(文部省（現・文部科学省）スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究協力者会議  
「スポーツにおけるボランティア活動の実態等に関する調査研究報告書」2000)

### 1-4 チームの定義

チームの定義は、「共通の目的や達成すべき目標、そのためのアプローチを共有した少数の集合体」とであるとされている。つまり、「仲間が思いをひとつにして同じゴールに向かって進み、機能する」のがチームだといえる。

日本社会では、協調性が重視され、個より集団が尊重されてきた。しかし、それは個の考えよりも多数の意見を重視するものであり、多数の意見と異なる者は排除されるといった集団文化であった。チームは単なる人の集まり、集団ではない。欧米から入ってきた「チームビルディング」の考え方では、まず個が尊重され、多様な個を組み合わせた集団をチームとして機能させることに重点がおかれる。

現在、スポーツイベントや競技大会において、スポーツボランティアは必要不可欠な存在であるが、スポーツボランティアが一人ひとりで行動してもイベントは機能しないどころか、かえって運営の妨げになることさえある。しかしまた、個が失われた集団は、単なる人の集まりでしかない。スポーツボランティアがめざすチームは、単なる集団ではなく、個々が尊重された上で同じゴールをめざす人たちの集まりである。そして、グループではなく「チーム」として機能した時、スポーツボランティアの力は無限に発揮される。  
(チームビルディングジャパンホームページ <http://www.teambuildingjapan.com/>)

### 1-5 リーダーの定義

リーダーの定義は、「つき従う者がいる者」とされる。ピーター・F・ドラッカー『プロフェッショナルの条件』によれば、「つき従う者」とは、強制力をもって従わされた者ではなく、そのリーダーを信頼するがゆえに、自らの意志に基づいて従う者を意味している。また、「リーダーとは、目標を定め、優先順位を決め、基準を定め、それを維持する者である」という考え方もある。

## 2 スポーツボランティアについて

### 2-1 スポーツボランティアの楽しみ方

スポーツボランティアを楽しむ方法は、スポーツの本質を分析すると見えてくる。

スポーツは、「スポーツをすることで、楽しみを享受できる」ことが、本来の“持ち味”である。一方、今日では、スポーツボランティアとしてスポーツ活動をささえることも、スポーツの楽しみ方のひとつとなっている。

「スポーツは筋書きのないストーリー」であり、展開や結末が決まっていないからこそ、観客が声援を送る。そこには「プレーによる湧きあがる感動や感激」がある。スポーツボランティアたちは、活動中その場面を直接見られないことも多いが、それでも、同じ瞬間に、同じ場所で同じ空気を共有できる。その意味で、スポーツボランティアたちも、スポーツという、感動の瞬間をささえた一員である。スポーツをする人、みる人らをささえ、スポーツにおける大切な役割をまっとうできたことこそ醍醐味となる。さらに、この喜びは他のボランティアと分かち合うことで倍増し、自身のかけがえのない記憶となる。それこそが、「スポーツボランティアの楽しみ」である。

(日本スポーツボランティア学会「スポーツボランティアハンドブック」2008)

#### スポーツボランティアの意義・やりがい

- ・スポーツをする人・みる人の役に立てる
- ・世代や職業・経歴の異なる仲間ができる
- ・役割をまっとうする達成感を仲間と共有できる
- ・自身の専門性・特技を生かした活動ができる
- ・さまざまなスポーツと接することができる
- ・スポーツ以外のボランティア活動へも広がる

### 2-2 仲間づくりと仲間の受け入れ方

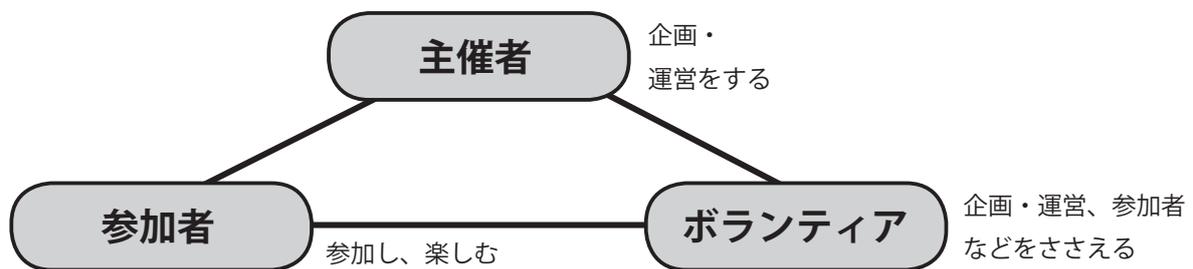
どんな分野においても、同じ志を持った者が集い、仲間になることはすばらしい。特にスポーツボランティア活動体験者からは、活動に参加することですばらしい経験を得られたとの感想が多く聞かれる。より多くの人々がスポーツボランティアに参加する機会を得て、充実したボランティア活動を通じて仲間を増やし、生活に潤いが生まれることを期待したい。

## 3 スポーツボランティア・リーダーに求められるもの

### 3-1 リーダーの心得

スポーツボランティア・リーダー（以下リーダー）は、スポーツイベントや企画、定期的なスポーツ活動において、それらがよりよく運営されるように主体的に考え、行動する立場にある。具体的には、イベントや企画、活動の成り立ちや主旨をよく理解し、一般のボランティアへ説明することや、一般のボランティアの能力を把握し、的確な指示をすることなどが求められる。こうすることで、「主催者とボランティアのかけはし」になることが、リーダーに求められる大切な役割である。

#### スポーツイベント・活動における各者の立場と役割



スポーツボランティア・リーダー：

- ① イベントや企画、活動の内容をよく理解する
- ② 企画・運営をささえる
- ③ 一般のスポーツボランティアを取りまとめる
- ④ 一般のスポーツボランティアへの的確な指示や判断を行う
- ⑤ 一般のスポーツボランティア一人ひとりの能力が生かせるように導く

### 3-2 リーダーの立場と役割

「リーダーの立場と役割」をまっとうするために、リーダーは、事前に次のような事前準備に力を入れる必要がある。

- ① 開催目的や主催者の意図を知っておく
- ② スポーツの基本的なルールを確認しておく
- ③ 一般のボランティアよりも多くの知識・経験を持っておく

また、当日は次のような心がけが重要となる。「挨拶」は日常生活において当たり前のことであるが、リーダーシップを発揮するためにはさらに意識しておこなう必要がある。また、「自らが楽しむ」ことは、「モチベーションが上がる環境づくり」につながる。

- ① 事前準備に力を入れる
- ② 挨拶は大きな声で行う
- ③ 一般ボランティアのモチベーションが上がる環境づくりを心がける
- ④ 一般ボランティアメンバー一人ひとりへ気を配る
- ⑤ 自らが楽しむ

## 4 スポーツボランティアの現状把握と課題

### 4-1 スポーツボランティア活動状況

47都道府県で、スポーツボランティアバンク\*を設置しているのは、13府県であった。運営主体別に見ると、自治体が主体となっているのは6府県（埼玉、三重、大阪、山口、佐賀、宮崎）、体育協会が事業主体となっているのは1県（和歌山）であった。

地方自治体がスポーツ振興に関する事業を展開する上で、スポーツボランティアの果たす役割は大きい。スポーツボランティアバンク設置の目的は、ボランティアの人材確保にある。

\* スポーツボランティアを行いたい人が自分の情報を登録し、ボランティアをしてもらいたい側が、その活動内容の情報等を提供することで、「スポーツボランティアのマッチング」を行うしくみ。

#### ●都道府県のスポーツボランティアバンクの登録状況（2013年度）

都道府県	名称	設置年	登録者数(人)	運営主体	設置経緯・目的など
宮城県	グランディ・21ボランティア	2003	101	任意団体	FIFAワールドカップ（2002）のボランティアを組織化。宮城総合運動公園「グランディ・21」で活動
福島県	NPO法人 うつくしま スポーツルーターズ	2005	141	NPO法人	日本スポーツマスターズ（2004）のボランティアを組織化。2007年より自主運営組織に
埼玉県	埼玉県スポーツボランティア	2008	5,572	自治体	国民体育大会（2004）のボランティア、スポーツ推進委員などの個人・団体を登録
神奈川県	NPO法人 かながわ スポーツボランティアバンク	2003	127	NPO法人*1	国民体育大会（1998）のボランティアから自主運営組織へ
三重県	みえのスポーツ応援隊	2012	343	自治体	新規イベント開催のための人材確保
京都府	京都府立体育館スポーツボランティア 協議会「はぐくみ」	1999	23	任意団体	スポーツボランティア養成講座の修了者を組織化
大阪府	モッピークラブ	1999	258	自治体	国民体育大会（1997）のボランティアを組織化
山口県	山口県スポーツボランティアリーダー	2002	1,848	自治体	国民体育大会（2011）に向け、県でスポーツボランティアリーダーを養成し、組織化
和歌山県	和歌山県スポーツボランティアバンク	2004	131*2	体育協会	「県市町村対抗ジュニア駅伝競走大会」のボランティアを中心に登録制度を開始
徳島県	とくしまスポーツすだつネット	2008	255	スポーツ 振興財団	既存イベント充実のための人材確保
愛媛県	愛媛県地域スポーツボランティア・ ネットワーク	2003	39	スポーツ 振興事業団	地域スポーツクラブの運営スタッフの確保
佐賀県	佐賀県スポーツボランティアバンク	2006	377	自治体	全国高等学校総合体育大会（2007）に向け募集したボランティアを組織化
宮城県	宮城県スポーツボランティアバンク	2009	57	自治体	1989年設立の指導者バンクに日本スポーツマスターズ（2001）のボランティアを加えて再編成

\*1 1996年～2003年までは神奈川県が運営。（笹川スポーツ財団「スポーツ振興に関する自治体調査」（2013）より作成）

\*2 2012年度の登録者数。

## 4-2 スポーツボランティアバンクの課題

都道府県スポーツボランティアバンクに運営上の課題を問うたアンケートによると、「活用の場の少なさ」「登録者数の低下」「広報・情報提供」「登録者との連絡」「市町との連携」など、様々な課題が浮き彫りになった。最も多かったのは、スポーツボランティアを活用する場所やイベントを確保することが大きな課題である、との回答だった。

分類	代表的な回答例	回答自治体数
活用の場の少なさ	スポーツボランティアの活動できる場が少ないので場の提供が大きな課題である	5
登録者数の低下	会員を増やす。登録者の平均年齢が高く、若い世代の新規登録者数が伸び悩んでいる	3
広報・情報提供	スポーツボランティアバンクの県民への周知・スポーツボランティアを活用するための情報提供	3
登録者との連絡	登録者の活動意思確認の手法。活用のための日程調査の個別対応が困難	3
市町との連携	人数は把握しているが市町の活用実績等は把握していない、市町とどのように連携していくのが課題	1

(笹川スポーツ財団「スポーツ振興に関する都道府県・政令指定都市調査」2013より作成)

## 5 スポーツボランティア仲間との付き合い方

### 5-1 スポーツボランティア活動とは

スポーツボランティア活動には、日常的な活動（クラブ・団体などでの運営・管理、障害者スポーツのサポート等、定期的なボランティア）と、非日常的な活動（スポーツイベントなどでの不定期なボランティア）がある。当然、どのようなスポーツボランティア仲間と出会うかは、その活動の内容や頻度、活動場所によって異なる。

### 5-2 他のスポーツボランティア活動仲間とのコミュニケーション

スポーツボランティア活動は、近年実施種目の多様化などもあり、多岐にわたっている。例えば、応急処置や怪我予防、疲労回復に関わる活動など、専門知識を要するボランティア（専門ボランティア）としては、「AEDモバイル隊」「スポーツマッサージ」「スポーツ・アロマ」などの活動が挙げられる。また、水上でのスポーツにおいては、「ライフセーバー」としての活動や、カヤックやボートを利用した参加者のサポートが欠かせない。

このように、各スポーツイベント等の特性、特徴によって、スポーツボランティアの活動環境は大きく異なる。それぞれの主催者は、必要となる活動内容を取りまとめ、各スポーツボランティアが得意とする活動などを把握し、両者を連携させることではじめてイベントや活動を成功させることができる。また、各スポーツイベントの主催者や活動団体同士が相互に理解を深め、それぞれの経験を共有し、その後の活動に活用・応用することで、スポーツボランティア活動全体を発展させることができる。

### 5-3 障害者とスポーツボランティア

スポーツボランティア活動には、イベント等に参加する障害者を直接サポートする活動もあるが、障害者がボランティアとして活動する場合もあり、その環境づくりも整備する必要がある。

たとえば、車いす利用者は、受付や記録証発行等、会場のなかでの移動が少なく着席のまま行える作業などであれば、健常者と変わりなく活動することができる。ボランティア活動を体験することが、ボランティア本人の自信につながるという例もある。

（事例紹介）

ある障害者がイベントでボランティア活動を行った。ボランティアの解散式にて、リーダーが他のスポーツボランティアやイベント参加者にそのボランティアの活躍を紹介したところ、大きな拍手が起こった。本人は恥ずかしそうにしていたが、後日、その障害者の関係者から、「本人はかねてから引きこもりがちだったが、ボランティア体験後それが解消した」という報告があった。

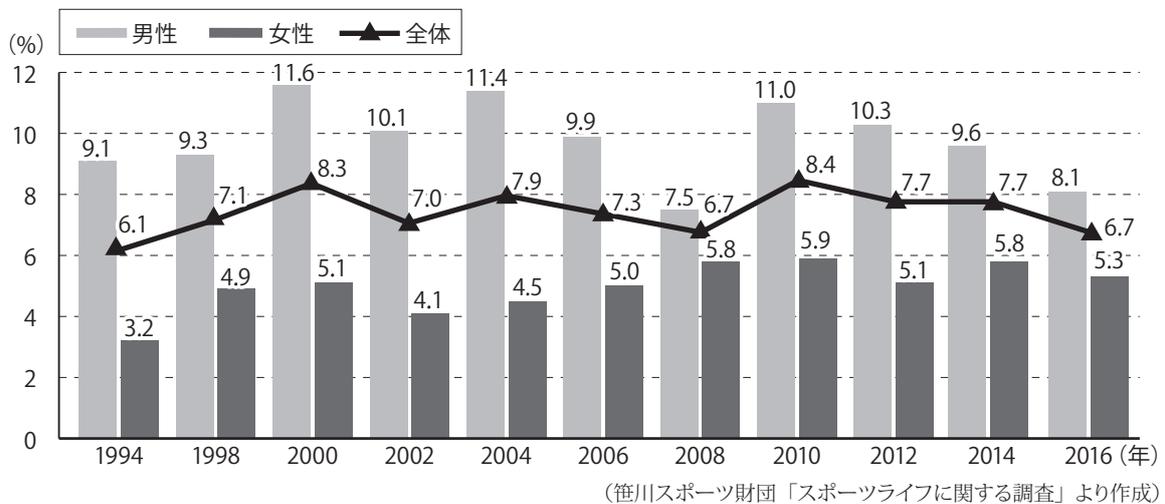
# スポーツボランティアに関する社会状況

## 1 スポーツボランティアの統計

### 1-1 データで見るスポーツボランティア

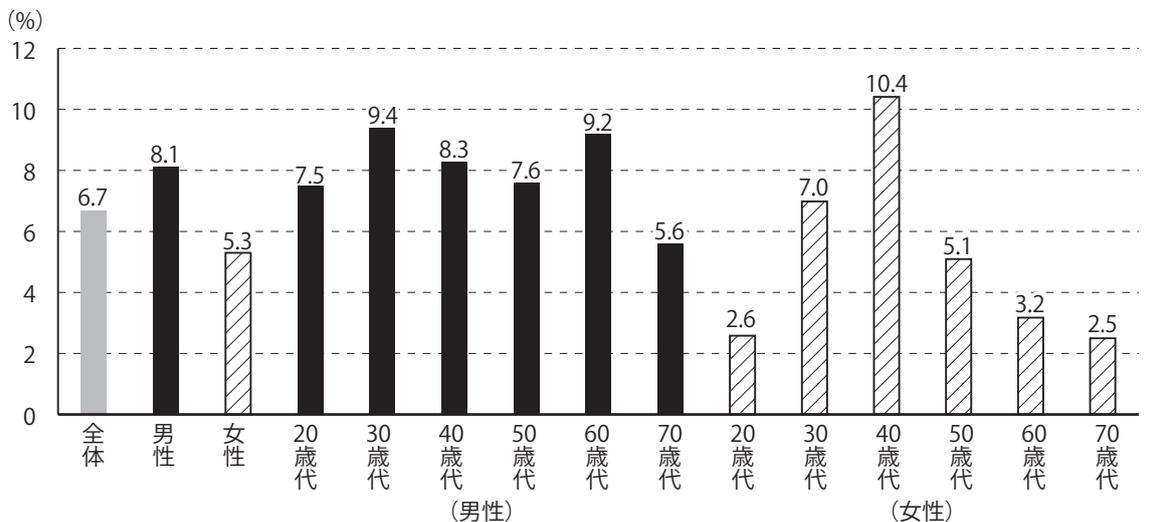
過去1年間にスポーツボランティアを行ったことが「ある」と回答した者は成人全体の6.7%で、2014年調査と比べて1.0ポイント減少している。1994年からの経年で見ると、2010年で最高値となったが、過去20年間ほぼ横ばいの状況である。

#### ●成人のスポーツボランティア実施率の年次推移



スポーツボランティア実施率を性別、年代別に見ると下のグラフの通り。性別に見ると、男性が8.1%、女性が5.4%と、男性の方が女性よりも実施率が高かった。また、年代別では、男性では30代、女性では40代の実施率が最も高くなっている。

#### ●成人のスポーツボランティア実施率（性別、年代別）



## ●スポーツボランティアの実施希望率

今後のスポーツボランティアの実施希望をたずねたところ、「行いたい」（「ぜひ行いたい」＋「できれば行いたい」と回答した者の割合（実施希望率）は、成人では13.9%だった。実施率6.7%に対して実施希望率13.9%と、潜在需要の割合（実施希望率－実施率）は7.2%あることがわかる。一方、10代の場合は、実施率は15.0%（男子18.0%、女子12.1%）、実施希望率は38.3%という結果だった。また過去1年間にスポーツボランティアを行ったことが「ある」と回答した者を対象に、実施した活動は楽しかったかどうか、スポーツボランティアの内容別にたずねた結果、「スポーツイベントの手伝い」については「楽しかった」が48.5%、「どちらかという楽しかった」が29.1%と、3/4以上が「楽しかった」と回答している。

## ●スポーツボランティアの内容

スポーツボランティアの実施内容について、『日常的な活動』『地域のスポーツイベント』『全国・国際的なスポーツイベント』に大別し、具体的な活動の内容、年間の実施回数についてたずねた。活動内容の上位は表1の通り。

### ●ボランティア活動内容の上位（成人）

地域の大会・イベントの運営や世話	50.8%
日常的な団体・クラブの運営や世話	36.4%
日常的なスポーツの指導	28.7%

（笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2016、笹川スポーツ財団「10代のスポーツライフに関する調査」2015より作成）

## 1-2 スポーツライフ（する・みる・ささえる）の現状で見ると

スポーツには、「する・みる・ささえる」の3つの楽しみ方があるといわれる。「するスポーツ」は自らスポーツを行うこと、「みるスポーツ」はスポーツ観戦、そして「ささえるスポーツ」がスポーツボランティアのことを指す。それぞれの割合は以下の通りで、まだまだスポーツボランティア実施率が低いことが分かる。

		成人 (n=2,926)	10代 (n=1,691)
するスポーツ	年1回以上実施	72.1%	86.8%
	週2回以上実施	44.8%	68.6%
みるスポーツ※	年1回以上の直接スポーツ観戦	32.5%	42.4%
ささえるスポーツ	年1回以上のスポーツボランティア	6.7%	15.0%

※過去1年間に競技場やグラウンドなどで、直接スポーツの試合等を観戦したことがある人

（笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査」2016、「10代のスポーツライフに関する調査」2015より作成）

## 2 スポーツボランティアの分類と様々な活動

### 2-1 スポーツボランティアの分類

スポーツボランティアは役割とその範囲から、大きく3つに分類することができる。

- 定期的な「クラブ・団体ボランティア」
- 不定期な「イベントボランティア」
- トップアスリートやプロスポーツ選手による「アスリートボランティア」

#### クラブ・団体ボランティア（クラブ・スポーツ団体）— 定期的活動 —

##### ● ボランティア指導者

指導・コーチ、指導アシスタント

##### ● 運営ボランティア

クラブ役員・幹事、世話役、運搬・運転、広報、データ処理、競技団体役員 など

#### イベントボランティア（地域スポーツ大会、国際・全国スポーツ大会）— 不定期的活動 —

##### ● 専門的ボランティア

審判、通訳、医療救護、大会役員、データ処理 など

##### ● 一般ボランティア

給水・給食、案内・受付、記録・掲示、交通整理、運搬・運転、ホストファミリー など

#### アスリートボランティア

##### ● トップアスリート・プロスポーツ選手

ジュニアの指導、施設訪問、地域イベントの参加 など

## 2-2 スポーツボランティアの活動紹介

### ● クラブ・団体ボランティア

「クラブ・団体ボランティアは、地域スポーツクラブやスポーツ団体におけるボランティアを指しており、日常的で定期的な活動といえる。具体的には、地域のスポーツ少年団やママさんバレーボールチームなどで監督やコーチを務める「ボランティア指導者」が考えられる。これには、監督やコーチが指導する際の指導アシスタントも含まれる。また、クラブや団体の役員や幹事、練習時に給水などを担当する世話係、競技団体役員などの「運営ボランティア」も、クラブ・団体ボランティアに位置づけられる。」

(笹川スポーツ財団「スポーツ白書」2017)

### ● イベントボランティア

「イベントボランティアは、地域における市民マラソン大会や運動会、さらには国体や国際大会をささえるボランティアを指しており、不定期的活動といえる。イベントボランティアのうち、専門的な知識や技術が必要な「専門ボランティア」としては、審判員や通訳、医療救護員、データ処理、大会役員などがあげられる。「一般ボランティア」には、特別な技術や知識が不要で、誰にでも容易に関わることができる給水・給食、案内・受付、記録・掲示、交通整理、運搬・運転、そして選手の滞在・訪問を受け入れるホストファミリーなどがある。」

(笹川スポーツ財団「スポーツ白書」2017)

### ● アスリートボランティア

「現役・OBのプロスポーツ選手やトップアスリートによるアスリートボランティアは、オフシーズンに福祉施設を訪ねたり、ジュニアのスポーツ指導や地域のイベントに参加したりする社会貢献活動に奉仕する。プロ野球選手やプロサッカー選手の活動はもとより、最近ではさまざまな種目のトップアスリートが一般社団法人やNPO法人等を組織し、活動するケースが増えている。総合型地域スポーツクラブ（総合型クラブ）の普及やイベントの多様化、国際的なスポーツイベントの開催等により、スポーツボランティアの果たす役割は、今後さらに重要になるであろう。」

(笹川スポーツ財団「スポーツ白書」2017)

## 3 障害のある人のスポーツ

### 3-1 ダイバーシティとは

ダイバーシティは「多様性」と訳される。もともとはアメリカにおける人種や女性に対する機会均等や差別是正から生まれた考え方である。本来は「Diversity and Inclusion (多様性と受容)」であり、多様な人が集まり、その違いを受け入れて互いを尊重しながら生きる社会を表している。

性別や国籍の違いにだけ着目して「女性は〇〇だから」とか「日本人は〇〇だから」と表現すれば、かえって偏見を生んでしまうことになる。人と人の違いは外見から判断できる性別、年齢、国籍といったものだけではなく、職業、趣味や価値観など内面の要素が組み合わさり、その属性は無限大にあると言われている。

多様な人々が集まり活躍する社会には、様々な能力や豊かな視点がある。以前は多様な社会の在り方は、ひとつのお皿の中で、様々な材料がそれぞれの味を主張しながら存在する一皿のサラダに例えられた。近年は様々な色が重なり合って、回転させるたびに違う情景を作り出す万華鏡の方が近いと言われる。多様な個性が繋がることで相互作用を生み、新たな可能性を作り出すのである。

ダイバーシティの基本概念は次の3つである。

- ①それぞれの「違い」を尊重し受け入れること
- ②「違い」を称える（価値を見つける）こと
- ③一人ひとりが活躍する機会を与えられ、また活躍できること

### 3-2 スポーツボランティアにおけるダイバーシティ

ボランティア活動の現場は社会の縮図であり、そこには幅広い世代、学生や会社員、障害のある人やない人など多様な人が集まっている。互いの良さを尊重しながら一人ひとりがチームに貢献することが、まさにダイバーシティ社会の在り方と言える。

ボランティア間のダイバーシティは、活動自体をより良いものにする。たとえばチームでスポーツイベント会場内の案内という活動をしていたとする。チームのダイバーシティを生かし、それぞれのボランティアが自分の視点からの気づきを共有したならば、「口頭での説明に頼らず図面を使ってみよう」とか、「通路に小さな分りにくい段差があるので声をかけて注意を促そう」と、気づきにくいポイントにも配慮することができる。

個々人の多様性への配慮は、多様であるがために、マニュアルへ一律に落とし込むのは難しいが、多様なボランティア仲間の気づきを集めれば、マニュアルを超えた“おもてなし”が可能となる。

2020年東京オリンピック・パラリンピックのビジョンに「一人ひとりが互いを認め合う（多様性と調和）」がある。スポーツは参加する選手、観客とボランティアが自然に交流する機会を生み出す。交流することによって相手への関心が芽生え、それが他者への理解と受容へ発展する。人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治、障害の有無など、あらゆる面での違いを肯定し、自然に受け入れ、互いに認め合うことで、すべての人が自分らしく生き生きと暮らす社会の実現が期待されている。

### 3-3 障害者スポーツの起源

障害のある人たちのスポーツは、障害者の機能回復訓練としてはじまった。

ロンドン郊外のストック・マンデビル病院において、第二次世界大戦で負傷した傷病兵のために脊髄損傷病棟を開設。その責任者であったL.グットマン博士が、機能回復訓練（リハビリテーション）の手段としてスポーツを積極的に取り入れたのが、後にパラリンピックへと発展した。

その後、スポーツが持つリハビリテーション効果が、身体的な機能回復のみならず、スポーツで自信や勇気を取り戻し、物事に積極的に取り組むようになるなど、心理的な側面にもおよぶことが認識されるようになった。また、スポーツは、障害があることで孤独になりがちな障害者にとって、社会の一員としての自信を取り戻すための有効な機会であり、社会参加においても大きな効果があるともいわれる。現在、スポーツは障害者の余暇活動として、また、社会参加の重要な機会として捉えられるようになっている。



©おいでませ！山口大会

### 3-4 障害者スポーツの可能性

日本では、「障害者基本法」において、障害者を次のように定義している。

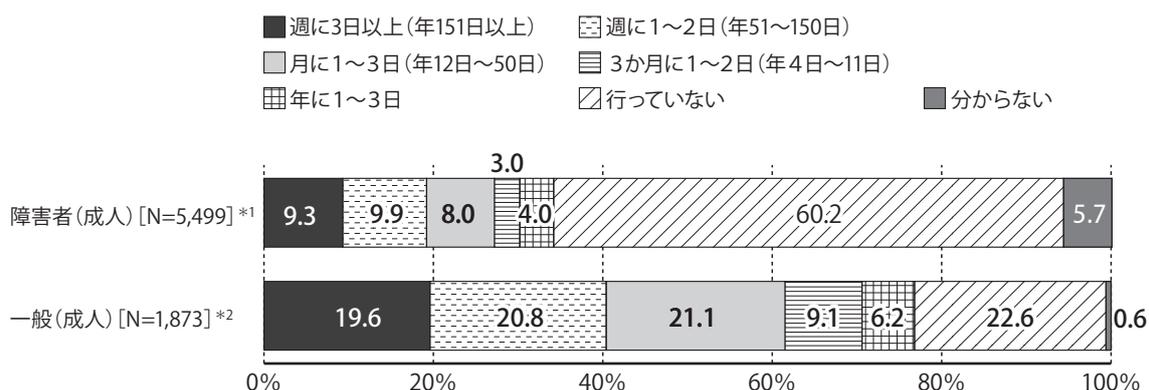
「身体障害、知的障害、精神障害（発達障害を含む。）その他の心身の機能の障害（以下「障害」と総称する。）がある者であって、障害及び社会的障壁により継続的に日常生活又は社会生活に相当な制限を受ける状況にあるものをいう。」

内閣府「平成26年版 障害者白書」によると、身体障害児・者、知的障害児・者と精神障害児・者を合計すると約787万人で、これは人口の約6%にあたる。およそ17人にひとりの割合となり、障害者が身近な存在であることがわかる。

スポーツには3-3に述べたような効果があるが、それと同様に重要なのは、人が等しくスポーツをする権利を持っていることである。2011年に施行された「スポーツ基本法」には、「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利」と記されている。

障害のある人の中には身体を動かすこと自体が難しい人もいるが、身体を動かすことができる人にとって、スポーツは重要な余暇活動のひとつである。しかしながら、2015年にスポーツ庁が実施した調査によると、「週に3日以上」と「週に1～2日」を合わせた、「週1日以上」のスポーツ実施率では一般成人が40.2%なのに対し、障害者では19.2%であり、障害者は一般成人の半分程度となっている（下のグラフ）。障害のある人が、一般の成人にくらべて、スポーツをしていない実態が確認できる。スポーツ基本法の施行後、こうした環境の改善が期待されているが、まだまだ、健常者のスポーツ環境に比べると改善点が多い。中でも、例えば障害があるために体育館までの移動が難しい、ひとりで練習することが難しいといった人にとって、スポーツボランティアによる支援は特に有効的である。

#### ●過去1年間に運動・スポーツを行った日数



\*1 スポーツ庁「障害児・者のスポーツライフに関する調査」(2015)

\*2 内閣府「東京オリンピック・パラリンピックに関する世論調査」(2015年6月)

また、障害者がスポーツを楽しむためには、個々の障害者の身体の状態に合わせて、安全に配慮したスポーツ指導ができる人材が求められる。日本障がい者スポーツ協会では、障がい者スポーツ指導員の資格制度を設けて、こうした人材の養成に努めており、資格を持った指導員の多くがボランティアとして、地域で障害者のスポーツ活動の支援にあたっている。

日本社会では、障害のある人と無い人が日常的にふれあう機会が少ないが、障害者スポーツ大会は、障害のある人と無い人が出会う貴重な機会である。それ以上に、障害者の真の力を目の当たりにできる貴重な機会である。障害者スポーツの大会にボランティアとして参加し交流することにより、障害のある人たちを理解し、感動や友情を分かち合うことができる。また、「障害者は支えられる人」という固定概念がある中、昨今は障害者自らがスポーツボランティアとして活躍している。彼らの視点から他者への配慮の方法を学ぶことは多く、また障害の有無にかかわらず活動を共にすることで、互いへの理解を促進することができる。



©Special Olympics Nippon



©おいでませ！山口大会

### 3-5 障害者スポーツの国際大会

障害者スポーツの国際大会には、以下のものがある。

- 身体障害（肢体不自由、視覚障害）：パラリンピック
- 身体障害（聴覚障害）：デフリンピック
- 知的障害：スペシャルオリンピックス、パラリンピック

歴史的に見ると、障害別、あるいは競技別の障害者スポーツ組織は、徐々にパラリンピックという同一の競技会にまとまっていった。一方、パラリンピックに参加せず独自で国際大会を開催している組織が、デフリンピックとスペシャルオリンピックスである。デフリンピックは、1995年に国際パラリンピック委員会（IPC）を脱退しており、スペシャルオリンピックスもIPCには加盟していない。

デフリンピックは、1924年設立の「国際ろう者スポーツ委員会（ICSD）」を前身とする最古の障害者スポーツ組織であり、聴覚障害者を競技者とする。2001年から、大会名と共に組織名も「デフリンピック」という名称を使用している。

スペシャルオリンピックスは、スポーツを通じた知的障害者の自立と社会参加を目的とする障害者スポーツ組織であり、競技会開催だけでなく、地域社会での継続的なスポーツトレーニングの機会を提供している。

なお、2000年のシドニーパラリンピック以降、パラリンピックへの知的障害者の門戸が開ざされたため、国際知的障害者スポーツ連盟（INAS-FID）の主催によってグローバル大会が開催されるようになった（2012年ロンドンパラリンピックより、知的障害者の参加が再開）。また、障害者とは区別されるが、臓器移植者を競技者とした「世界移植者スポーツ大会」も開催されている。

パラリンピックは障害者の超エリートスポーツへと発展、名実ともに「もうひとつのオリンピック」である。なお、デフリンピックとスペシャルオリンピックスも、国際オリンピック委員会（IOC）が名称を認めた団体である。パラリンピック、デフリンピック、スペシャルオリンピックスはいずれも、夏季・冬季それぞれ4年に一度、世界規模で開催されている。

#### ●障害の種類と国際スポーツ大会

	障害区分	障害	国際スポーツ大会	
障害者	身体障害	肢体不自由	機能障害	パラリンピック
			頸椎損傷	
			脊髄損傷	
			切断	
			脳性まひ	
		視覚障害	パラリンピック	
		聴覚障害	デフリンピック	
		内部障害	無し	
	知的障害		パラリンピック	
			グローバル大会	
		スペシャルオリンピックス		
	精神障害（発達障害含む）	無し		
臓器移植者			世界移植者スポーツ大会	

【出典】（公財）日本障がい者スポーツ協会資料

## 4 スポーツボランティアの現状

### 4-1 スポーツに関する法律等の流れ

スポーツボランティアの現状を考えるために、近年のスポーツに関する法律の変遷等をまとめておく。

#### ●スポーツに関わる法律

1961年	「スポーツ振興法」 東京オリンピック開催（1964年）を視野に入れ制定
1998年	「スポーツ振興投票の実施等に関する法律」 通称「サッカーくじ法」。Jリーグは1993年に開幕
2000年	「スポーツ振興基本計画」 地域におけるスポーツ環境の整備充実をめざす
2010年	「スポーツ立国戦略」 好循環を柱にスポーツ振興の明文化や「する人」「観る人」「支える人」の重視を明記
2011年	「スポーツ基本法」 スポーツ権ならびに行政の責任分担とスポーツ団体などの支援と環境整備を明記
2012年	「スポーツ基本計画」 「スポーツボランティア」が計画の13か所に明記
2015年	スポーツ庁の設置

### 4-2 スポーツ基本計画とスポーツボランティア

文部科学省が2012年に策定したスポーツ基本計画では、以下のように、スポーツボランティアについての施策が明示された。

#### ●スポーツ基本計画（文部科学省2012年3月30日策定）

第3章「今後5年間に総合的かつ計画的に取り組むべき施策」より抜粋

（スポーツボランティア活動の普及促進）

- 国は、地方公共団体、大学・研究機関、スポーツ団体、民間事業者等と連携を図りつつ、スポーツボランティア活動に関する事例の紹介等の普及・啓発活動を通して、スポーツボランティア活動に対する国民の関心を高める。
- 地方公共団体においては、スポーツボランティアとして大きな貢献がある者を、例えば「スポーツボランティアマスター(仮称)」として認定しその功績を称えること等により、スポーツボランティア活動を奨励することが期待される。
- 地方公共団体やスポーツ団体等においては、地域住民が、日常的に総合型クラブをはじめとした地域スポーツクラブやスポーツ団体等の運営に参画できたり、校区運動会や地域スポーツ大会等のスポーツイベントの運営・実施やスポーツの指導に参画できる環境を整えることが期待される。

## 5 リーダーシップ

### 5-1 リーダーシップとは

『プロフェッショナルの条件』の著者、ピーター・F・ドラッカーは、リーダーについて、「つき従う者がいる者」とであると定義した。「つき従う者」とは、強制力をもって従わされた者ではなく、そのリーダーを信頼するがゆえに自らの意思に基づいて従う者を意味する。また、ドラッカーは、リーダーの第1要件として、「リーダーシップを仕事と見る」ことであると説き、リーダーシップについて「人を惹き付ける個性や、影響を与えることではない」とし、以下のように定義している。

「リーダーシップとは、組織の使命を考え抜き、それを目に見える形で明確に確立することである。リーダーとは、目標を定め、優先順位を決め、基準を定め、それを維持する者である。」

つまり、リーダーシップとは、カリスマ性や資質など、特定の間人が保有する特別な才能ではない。組織や事業の使命を明確にし、目標に対して責任を持ち、信頼を築きながら行動し模範を示すことである。こうしたリーダーシップを実践することで、誰でもリーダーになりえるのである。

### 5-2 ボランティアのリーダーシップ

リーダーシップには、「リーダーとしてのリーダーシップ」と、「個人としてのリーダーシップ」が存在する。日本で「リーダーシップ」といえば、多くの場合、前者で捉えられ、組織のトップやリーダーなど、限られた人が持つべきものだという風潮が根強い。

一方、欧米では、学校でも企業でも全員に「リーダーシップ（個人としてのリーダーシップ）」が求められる。これは、全員にリーダーシップがある組織ほど、少数のリーダーで率いられる組織よりも圧倒的に高い成果が出やすいと考えられているためといえる。日本では「船頭多くして船山に登る」ということわざがあるように、複数のリーダーがいると弊害が生じると捉えられがちだが、目標を明確にせず、好き勝手に指図ばかりする人は、そもそもリーダーの定義から外れる。

スポーツボランティアにおけるリーダーには、「リーダーとして」と「個人として」、両方のリーダーシップが求められる。役割や権限が異なっても、一人ひとりが、自分は何をするためにそこにいるのか、そのために何をしなくてはならないのかを考えることが、スポーツボランティア活動の大きな成果を生むことにつながる。ボランティアの語源が「志願兵」であるように、リーダーシップもまた、自ら志し、能動的に行動する、といったボランティアの本質と同様のものである。

### 5-3 フォロワーシップとは

フォロワーシップとは、フォロワー（メンバー）が集団の目的達成に向けてリーダーを補助していくことをいう。フォロワーは、リーダーによるリーダーシップとの関係のなかで効果を発揮できる。リーダーとフォロワーの間で「目的・方針共有－具現化－実行－検証」ができていないと、一人ひとりがバラバラで、組織として機能しない。

フォロワーシップの提唱者である米国カーネギーメロン大学のロバート・ケリー教授の調査によると、組織が出す結果に対して「リーダー」がおよぼす影響力は1～2割。対して「フォロワー」が及ぼす影響力は8～9割だという。組織改革をはじめるのはリーダーだが、完遂させるのはフォロワーである。

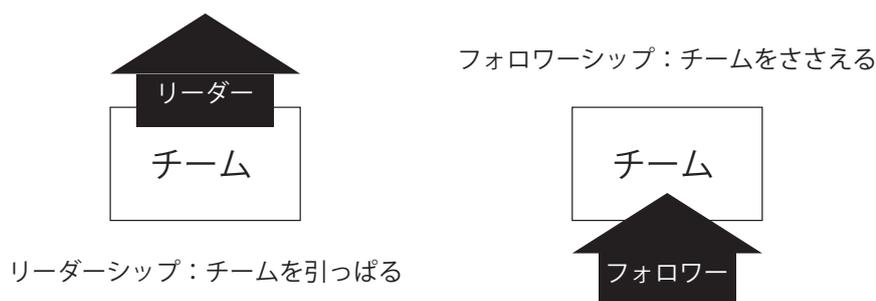
#### フォロワーシップが発揮された場合の、組織への効果

- ①目的・方針を共有して実行に移すことができる
- ②リーダーの判断や決断のミス、抜けや漏れを防ぐことができる
- ③現場の情報をボトムアップすることができる
- ④チームとしての一体感を高めることができる
- ⑤提案・提言する雰囲気をつくることができる

#### フォロワーシップを発揮した場合の、個人的効果

- ①指示待ち的な姿勢から、自発的な行動に変わる
- ②リーダーの立場で考えることにより、リーダーの訓練になる
- ③一匹狼的な動きが、他メンバーと協働する動きに変わる

#### ●リーダーシップとフォロワーシップのイメージ



# コミュニケーションスキル

## 1 アイสบレイク

### 1-1 はじめに

スポーツボランティア活動の現場では、年齢、性別、社会経験、障害のある・無しにかかわらず様々な人たちが集まるため、豊かなコミュニケーション力が大切となる。コミュニケーションにおいて非常に大切なのが、他者を認め、理解する「他認の力」である。



### 1-2 心地よい空間を創り出すために

どんなスポーツイベントであっても、参加するボランティアたちにとって第一の難関が、他のボランティアたちとの交流である。よいスポーツボランティア・リーダー\*がいれば、心地よい空間へとリードアップしてくれるので、スムーズに交流が図れるが、リードアップがない場合には、冷え切った空気が流れ続けることになりかねない。こうした事態を打開するのに必要なのが、「アイสบレイク」である。アイสบレイクとは、コミュニケーションにおいて温かいムードをつくり、冷え切った雰囲気や和らげることをいう。会場ではじめて出会ったボランティアには、自ら「こんにちは!」と挨拶するだけで、アイสบレイクのきっかけとなり、後々、コミュニケーションがとりやすくなる。

#### アイสบレイクの目的

- ・コミュニケーションのきっかけをつくる
- ・居心地の良い環境をつくる
- ・良好な関係性の集団をつくる

\*スポーツボランティア・リーダー：ボランティア活動がスムーズに進むよう、チーム内のボランティアメンバーをまとめたり、イベント主催者と一般ボランティアとのパイプ役を努めたりする。リーダーには、スポーツボランティアの経験とリーダーシップが求められる。

### 1-3 グループワーク

スポーツボランティアの目標達成のために大切なことのひとつが、チームワークである。

チームワークを育むためには、「グループワーク」という手法を用いることが有効である。グループワークとは、グループに与えられた課題を、目的に合わせて練習・トレーニングしていく体験学習である。

ルールを守りながら、事前に設定した課題を解決する過程で以下の3点に気づくことが大切である。

- ①言語によるコミュニケーション（「伝える（話す）」「聴く」「質問する」）の必要性
- ②話し合いにおけるそれぞれの役割の大切さ
- ③コンセンサス（合意・形成）の方法及びその難しさと大切さ

### 1-4 リーダーとアイスブレイク

スポーツボランティア・リーダーが担うべきもっとも大きな役割のひとつは、活動に参加しているスポーツボランティアと円滑なコミュニケーションを図ることである。

活動の場の雰囲気や和らげるアイスブレイクやリードアップについても、スポーツボランティア・リーダーがリーダーシップを発揮し、率先して取り組む必要がある。

一方、リーダーが多くのメンバーをまとめ、心地よくリードアップしていくことには難しさも隠されているため、一人ひとりのボランティアがリーダーをサポートすることも、グループが力を発揮し、効果的に機能するためのサポートにつながっていく。

## 2 リスクマネジメント

### 2-1 リスクとは

ボランティア活動において、リスク (risk) は様々な形で存在する。リスクとは一般的に、「ある行動に伴って (あるいは行動しないことによって)、危険に遭う可能性や損をする可能性」などと定義される。ハザード (hazard) と同じように「危険性」と訳すこともあるが、ハザードは潜在的に危険の原因となりうるものを指し、リスクは実際にそれが起こり、現実の危険となる可能性を含めた概念といえる。ハザードがあるとしてもまず起こりえない場合、リスクが低いといえる。一方、確率は低いが起こった場合の被害が甚大であれば、リスクは高くなる。

### 2-2 スポーツボランティアにおけるリスク

スポーツボランティアにおけるリスクには、事件・事故・自然災害などがある。ここで言う事件とは犯罪の嫌疑がある事実であり、事故とは犯罪の嫌疑のない事実のことである。階段から人が落ちたという事象を例に挙げると、他人に押された結果として落ちた場合は事件であり、自分で転んだためであれば事故ということになる。

次に、直接的関与と間接的関与について説明する。

直接的関与は、その場で、直接の影響を受けるもののことであり、先述の事件・事故・自然災害が該当する。例えば、古くは1972年9月5日ミュンヘンオリンピックにおいて、人質9名全員と警察官1名がテロリストグループによって殺害される事件があった。最近では、2013年4月15日ボストンマラソンにおいて爆破事件が起きた。自然災害等には台風や地震、洪水などがある。いずれの場合にも、有事の際を想定して会場となる近隣の避難場所を確認しておくこと、また屋内であれば、非常階段や非常口などの場所を確認しておくことが大切である。さらに、これらの情報は事前説明会等で会場図面を用いて伝え、関係者間での共通理解としておく必要がある。また、近年では、天気予報ひとつをとっても詳細な予想ができる情報が増えてきた。事業の開催前に開催基準を定めておけば、天候が悪化した場合にもこういった情報をうまく活用して開催可否を判断することができる。これもリスク対応のひとつといえる。

一方、間接的関与とは、例えばテロを受けた翌年のボストンマラソンの参加申込数、あるいは他の地域で開催されるマラソン大会への参加申込数やボストンで開催されるマラソン以外のスポーツイベントへの参加申込数の減少など、間接的な影響を意味する。間接的とはいえ、その影響力は決して無視できるものではない。

## 2-3 リスク予測能力

リーダーには、イベントにおける様々なリスクを予測する能力が求められる。たとえば雨が降るというリスクを予知し、それにより発生する対応を考えておく必要がある。体育館内でのイベントであっても、事前の傘置き場の設置や濡れた体で会場入りする参加者への対応、色々な事前準備が考えられる。この対応を怠ると、体育館内で滑って転倒・負傷する事故などが発生する可能性が高まる。リーダーは、考えられるリスクの種類とその対応法を事前に予測し、備えておくことが必要となる。

### 【参考】

#### 1. 119番通報の方法について

119番通報をしたら、まず1つ目に火事か救急か、2つ目にどこで、3つ目に何があったのか、最後に自分の名前と今かけている電話番号が確認される。

外出先で場所を正確に伝えることは難しいが、自動販売機には住所を表示するステッカーが貼られているので探すと良い。また、携帯電話から119番に電話をかけた場合であっても地域の消防署につながるようになっている。そのため、「電柱の番号」や「信号機の地名表示」「道路標識にある管理番号」を伝えると現在地が特定できる。

#### 2. AEDについて

AEDは、心臓がけいれんし血液を流すポンプ機能を失った状態にあるときに、電気ショックを与えて正常なリズムに戻すための医療機器であり、2004年7月から非医療従事者である一般市民も使用できるようになった。公共施設や大きなビルの入口には、ほぼ設置されている。中には飲料の自動販売機に設置されていることもある。

## 2-4 備えておきたい対応方法

応急対応とは、一般的に参加者やボランティア自身の負傷や急病などに対する応急処置や手当を指す。さらに、負傷以外の様々なトラブルにも対応しなくてはならない。なお、厳密に言えば、「応急処置」は救急隊員が行う行為とされるため、一般市民が行うものは「応急手当 (first aid)」と呼ばれる。

以下のような、突発的な事象が発生した場合、いずれも速やかに、かつ正確な対応が求められる。

### ① 応急対応 市民ができる応急手当など

(例) 転んで腕を骨折・水分不足で倒れる・目にゴミが入る

### ② 事故対応 物損などの対応

(例) 看板が風で倒れる・財布を落とした

### ③ 苦情対応 トラブルへの対応

(例) 荷物がなくなった・迷子

### ④ その他 SNSなどへの対応

(例) 良くも悪くも、活動の感想・参加者の様子など (拡散する恐れがある)

## 2-5 応急手当を身に付けておくことの大切さ

リスク対処のために、リーダーは応急手当を身に付けておくことが有用である。また、どの方法が最適なのかを判断する力も求められる。応急手当の内容・手法は時代と共に変わるため、一度身に付けたあとも、常に復習するとともに、最新の対応方法を把握しておくことが必要になる。以下に主な応急手当の講習を示す。

### ① 日本赤十字社 救急法講習 (5時間)

基礎講習では、手当の基本、人工呼吸や心臓マッサージの方法、AEDを用いた除細動などを習得する。救急員養成講習では、日常生活における事故防止、止血の仕方、包帯の使い方、骨折などの場合の固定、搬送、災害時の心得などについての知識と技術を習得する。

### ② 普通救命講習 消防署関連にて実施 (3時間)

心肺蘇生やAED、異物除去、止血法などを学ぶ。救命技能認定証が交付される。

## 2-6 保険について

リスクに備えてイベント参加者やボランティアへの保険も数多く出ている。ボランティア活動中の事件・事故から身を守る上で、保険が果たす役割は大きい。スポーツボランティアに関わる保険には、以下のようなものがある。

### 【主に事業の主催者が加入するもの】

#### ①賠償責任保険

参加者やスタッフなどに何らかの被害をかけた場合に適応される。自らが保険に加入し弁済するケースと、イベント等の主催者がボランティアのために加入しておくケースがある。

#### ②傷害保険

ボランティア活動中等において、急激で偶然な外来の事故により被った傷害に対して、被害者のリスクを軽減する保険。ただし、保険支払いに対応するためには、各条件をクリアすることが必要となる。

### 【ボランティア個人が加入するもの】

#### ボランティア活動保険

全国社会福祉協議会が取り扱い、ボランティア活動中、自身がケガをした場合や、第三者の身体・財物に損害を与えた場合が対象となる。年間1,400円程度で加入できる。

## 2-7 具体的なリスク軽減

スポーツによりボランティアの活動内容は異なるが、リスク軽減のためにできることには共通するものもある。以下に例を挙げる。

### ①当日に備え、体調管理

特にスポーツイベントは、非日常の体験となるため、いつも以上に体力や精神力が疲労する。その前日に、長時間の移動やボランティア仲間との食事会などで睡眠時間などが十分でない場合は、疲労した状態で当日を迎えることになる。前日の集まりは楽しみのひとつではあるが、自身の体調管理を怠らずに活動にのぞむことが必要である。

### ②活動前に連絡系統を確認

いざ、困ったことが起こった時に、「誰に」「どうやって」聞けばよいのか分からない…とならないよう、活動前に連絡系統を確認しておくこと。

大規模スポーツイベントでは、ボランティアにタブレットを貸与し、不明点の確認を含む様々な大会本部とのやり取りを、オンラインでつながって連絡を取り合うケースもある。ただし、通常のスポーツイベントではまだここまで整備されていないため、チームとして円滑に機能するためにも、活動前に連絡系統を確認する必要がある。

### ③悪天候への対応

ボランティアの活動時間は、朝から夕方までの日中、夜間の活動、2日間連続など様々である。例えば冬季の屋外での活動によって体温が一度下がってしまうと、お風呂やストーブなどを使わなければ下がった体温を戻すことは難しい。寒さ対策に限らず悪天候の場合も考え、予備の着替えを用意しておくことが望ましい。ただし荷物が増えすぎないように、効果的な衣類を選ぶと良い。昨今は体を温めてくれるものから、汗を気化させて冷えやすいものまで素材も多様である。また、直射日光を浴びる可能性がある活動では、帽子・長袖長ズボン必須である。雨が予想される場合は、降ってからではなく、降り始める前に、防水ビニール袋へ荷物を入れておくが良い。濡れると困るものとして革製品や電子機器のことはすぐ思い浮かべるだろうが、着替えやタオルも濡れると使えなくなるので注意したい。

### ④応急手当後、受診を勧める

イベント会場で行えるのは応急での手当てに限られるため、必ず医療機関での受診を勧めること。たとえ軽度な出血で止血できた場合であっても、「念のため、医療機関を受診してください」と伝えること。外観からはわからない、例えば骨や筋肉などを傷めている可能性や更なる消毒が必要な傷であることも考えられる。

特に頭部の打撲や傷の場合には、見た目にはわからない内出血を起こし、悪くすると人命にかかわることもあるため、「必ず」受診するように勧めること。中には、痛めてから数時間後や一晩経過してから症状がでることもある。

⑤トラブルには複数のスタッフで対応等

大きなトラブルであればあるほど、複数人対応が望ましい。また、小さなトラブルであっても時間とともに大きな問題に発展するケースもある。ひとりではなく、複数で対応すれば、第一現場対応、第二現場対応、連絡役などの役割分担をすることが可能である他、二重事故を防ぐことにも繋がる。

# 日本スポーツボランティアネットワーク(JSVN)

## 1 活動について

### 1-1 設立意義と目的

2010年度の笹川スポーツ財団調査によると、47都道府県中14府県、18政令指定都市中6市に「スポーツボランティアバンク」が設置されており、ボランティアバンクは1999年から現在まで、年を追うごとに組織化されている。他方、過去10年間スポーツボランティア活動の実施率および実施希望者は、いずれもほぼ横ばいであることが明らかとなった。

このようななか、スポーツイベントを主たる活動とするスポーツボランティア組織の共通課題は、登録ボランティアへの活動機会の提供である。なかでも国際大会や国民体育大会開催のために立ち上げられた組織では、それ以降の活動機会が少なくなり、登録者数が減少する状況にある。スポーツ施設やプロスポーツクラブなどの活動母体があるボランティアは別として、活動母体がない民間のボランティア組織は、活動率の低下とともに今後の組織の存続が危惧されるところである。

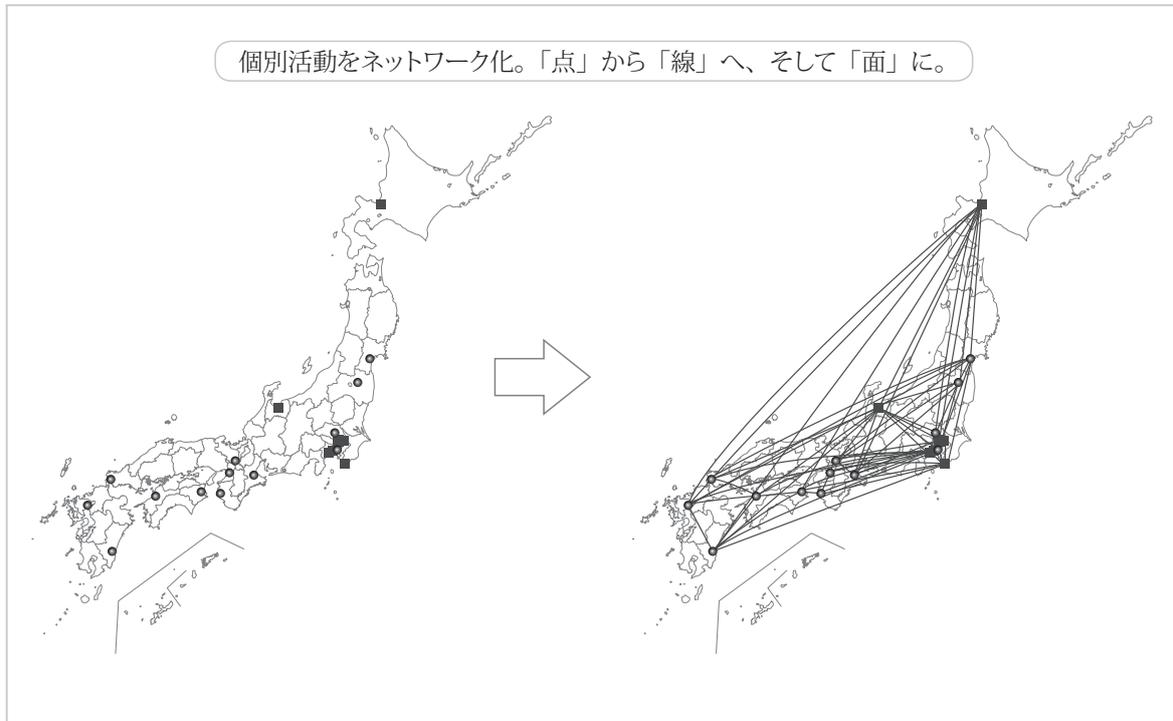
一方、2007年はじまった東京マラソンを契機に、スポーツボランティア活動の意義が広く社会に認知されるようになり、各地で開催されるスポーツイベントの成否にスポーツボランティアが大きく影響を与えるようになってきていることから、今まで以上にボランティア個人およびスポーツボランティア組織とボランティア受け入れ側との相互理解を深めることが重要となる。

今後、前述の課題に取り組むとともに、スポーツボランティア活動を全国に浸透させ、文化として確立するためには、全国各地のスポーツボランティア組織が「地域を越えた組織間連携を図り、活動状況を共有する」ネットワークを形成することが必要である。また、ネットワーク化により更に多くの活動機会の提供が可能となり、それぞれの組織活動を活発化することができる。

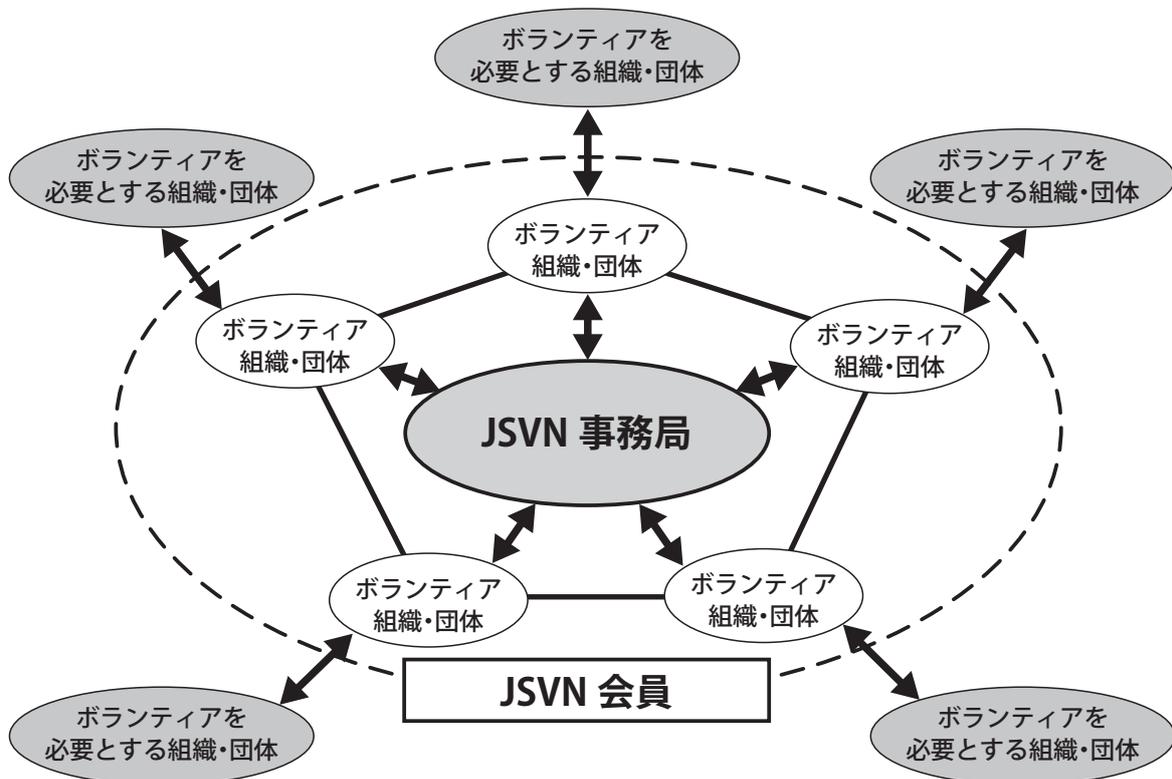
日本スポーツボランティアネットワーク(JSVN)は、前出のような現状をふまえ、「我が国のスポーツボランティア文化の醸成を図り、国民の生涯にわたるスポーツ活動を通じた豊かな生活の形成に寄与すること」を目的に、2012年に組織された特定非営利活動法人である。

全国でスポーツボランティアバンクを設置している都道府県は13、日本スポーツボランティアネットワーク会員団体は16であり、その他にも、国内で活動するスポーツボランティア組織が多くある。

●国内で活動するスポーツボランティア組織のネットワーク化イメージ



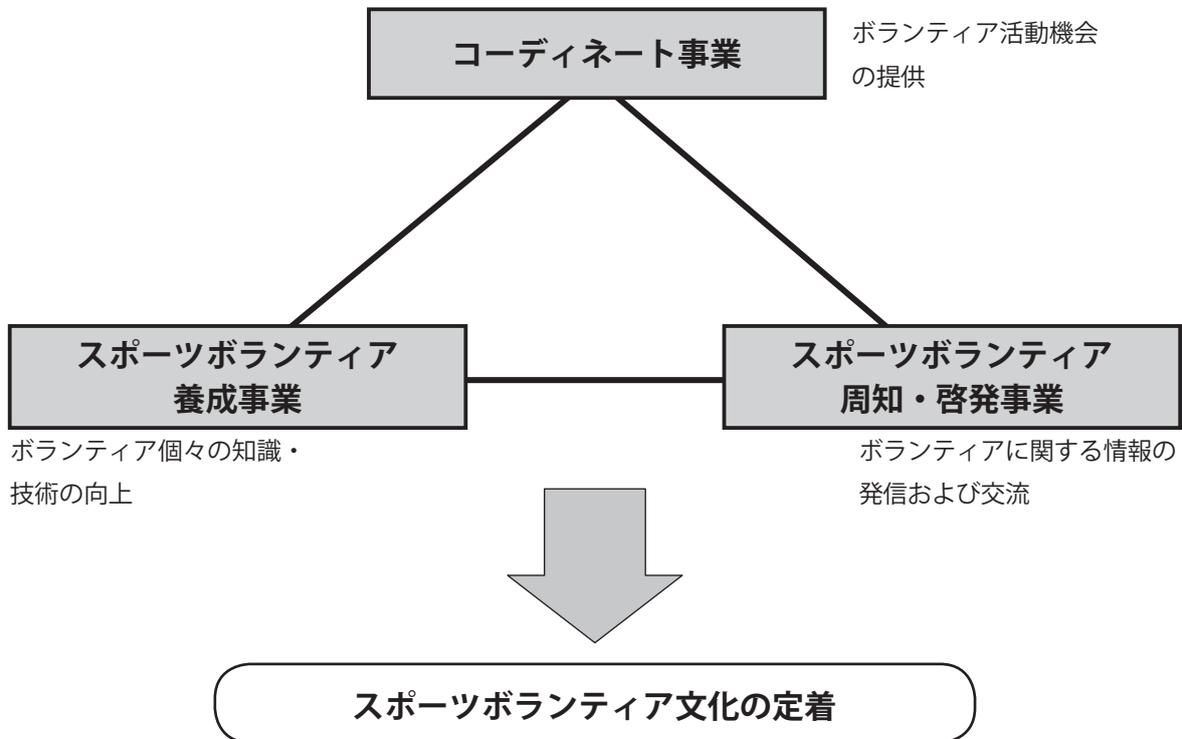
●JSVNと各ボランティア組織、ボランティアを必要とする側との関係



## 2 主な事業

### 2-1 3つの事業

JSVNでは、次の3つの事業を進めている。



### 2-2 スポーツボランティア養成事業

JSVNでは、スポーツボランティアの養成を目的に、ステップアップ形式で4つのプログラムを実施している。この他、ライセンス保有者に対して、自己啓発を促すためのスキルアップ研修会を開催し、人前での話し方教室や多様な文化・習慣を有する外国人への理解を深めるための講座、普通救命講習なども随時開催している。

#### ●スポーツボランティア養成プログラム

##### スポーツボランティア研修会

スポーツボランティア活動のやりがいや楽しみ方を知る。

##### スポーツボランティア・リーダー養成研修会

一般ボランティアと共に、楽しく充実した活動をするためのリーダーシップを学ぶ。

##### スポーツボランティア・上級リーダー養成研修会

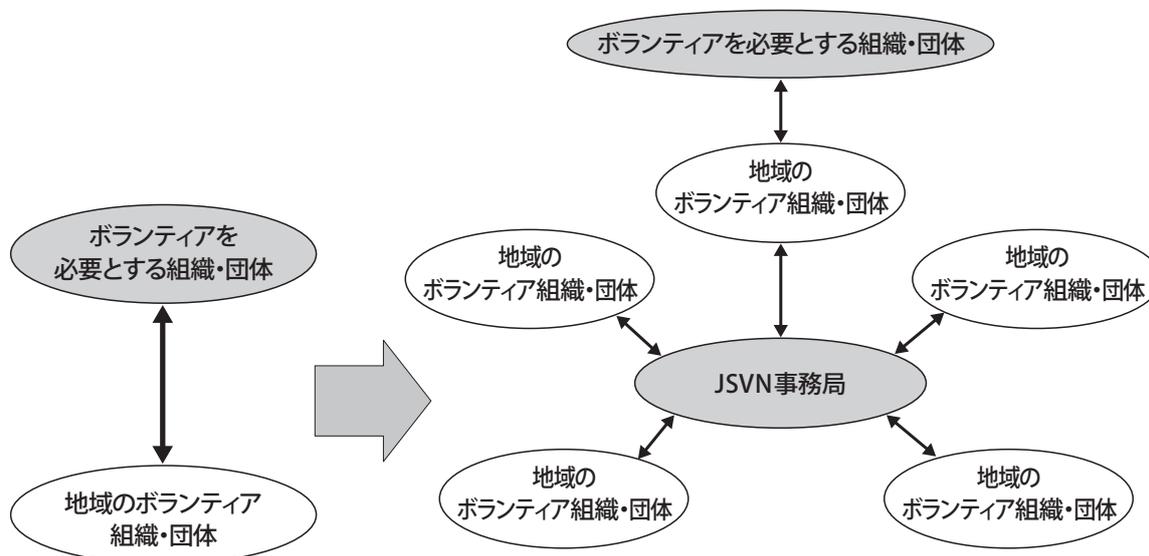
主催者・ボランティア共に満足度の高い活動コーディネートを学ぶ。

##### スポーツボランティア・コーディネーター養成研修会

ボランティア組織の運営をサポートするための知識を学ぶ。

## 2-3 コーディネート事業

JSVNでは、「ボランティアを必要とする団体」と「ボランティアに参加したい人」をつなぐ情報提供事業を行っている。スポーツボランティアを必要とする団体からの情報を集め、全国の会員団体に活動情報を提供し、各地域のボランティア登録者に発信している。



## 2-4 スポーツボランティア周知・啓発事業

JSVNでは、スポーツボランティアに関する研究事例、スポーツボランティア活動に関する活動報告を行う「スポーツボランティアサミット」を開催し、これからのスポーツボランティアのあり方を見出し、広く社会に発信している。

地域で活動するボランティア組織、行政、スポーツ関係者など、種目や役割などを超え、スポーツボランティアにかかわるそれぞれの立場の人が一堂に会し、意見交換を行う「スポーツボランティアシンポジウム」等も開催している。さらに、オリンピックのボランティア経験者からの活動報告や、海外のボランティア事例など旬な話題やボランティアのノウハウ等を提供する公開講座等も開催している。



### 3 スポーツボランティア養成プログラムの概要

#### 3-1 講習会概要

講習会名称	スポーツボランティア研修会	スポーツボランティア・リーダー養成研修会	スポーツボランティア・上級リーダー養成研修会	スポーツボランティア・コーディネーター養成研修会
内容	スポーツボランティア活動に必要な基礎知識	スポーツボランティア活動の実践知識	スポーツボランティア活動におけるチームビルディング	スポーツボランティア組織の運営および安全管理
時間時間	半日 (2~3時間)	1日 (5.5時間)	2日 (11.5時間)	2日 (12時間)
ライセンス	ライセンスなし (修了証の交付)	スポーツボランティア・リーダー	スポーツボランティア・上級リーダー	スポーツボランティア・コーディネーター
受講資格	○中学生以上 ○スポーツボランティア活動の経験がある者 ○スポーツボランティア研修会を受講・修了した者 (但し、本会の正会員団体に所属するボランティアが受講する場合、正会員団体からの申請によりスポーツボランティア研修会の受講を免除することができる)	○高校生以上 ○スポーツボランティア活動の経験がある者 ○スポーツボランティア・リーダーのライセンス取得後1年以上を経過し、かつ10日以上以上のスポーツボランティア活動経験がある者 ○本会または正会員団体が主催する下記のスキルアップ研修を受講し有効期限内のライセンスがある者。また、正会員団体が適任と認め推薦する者。	○18歳以上 ○スポーツボランティア・リーダーのライセンス取得後1年以上を経過し、かつ10日以上以上のスポーツボランティア活動経験がある者 ○本会または正会員団体が主催する下記のスキルアップ研修を受講し有効期限内のライセンスがある者。また、正会員団体が適任と認め推薦する者。	○スポーツボランティア・上級リーダーのライセンスを有している者 ○正会員団体に所属するボランティアであり、正会員団体の推薦がある者。または、正会員団体が適任と認め推薦する者。
受講料	1,500円	3,000円	6,000円	6,000円
評価・レポート	-	○	○	○
判定	-	○	○	○
面接	-	-	○	○
有効期限	-	取得日の次の3月31日から2年後の同月日 ※以降3年毎の有効期限	取得日の次の3月31日から2年後の同月日 ※以降3年毎の有効期限	取得日の次の3月31日から2年後の同月日 ※以降3年毎の有効期限

#### 3-2 更新講習概要

講習会名称	-	スポーツボランティア・リーダー更新講習	スポーツボランティア・上級リーダー更新講習	スポーツボランティア・コーディネーター更新講習
内容	-	スポーツボランティアの現状と社会認識およびそれぞれのライセンスに求める新たなスキル	-	-
時間	-	3時間以内	3時間以内	3時間以内
受講料	-	2,000円	2,000円	2,000円

#### 3-3 講師・指導者制度概要

講師名称	-	-	准講師	講師
講師認定手続き	-	-	「上級リーダー」のライセンスを有し、委員会の推薦を受け、かつ理事長が認めた者	「コーディネーター」のライセンスを有し、本人から申請があった者で、養成プログラム委員会の推薦を受け、かつ理事長が認めた者
有効期限	-	上級リーダー有効期間に準ずる	上級リーダー有効期間に準ずる	コーディネーター有効期間に準ずる

□執筆および編集担当

■執筆（50音順）

東 正樹

宇佐美 彰朗

工藤 保子

澤内 隆

園部 さやか

竹澤 正剛

二宮 雅也

渡邊 浩美

■編集

日本スポーツボランティアネットワーク スポーツボランティア養成プログラム委員会

スポーツボランティアリーダー養成研修会 テキスト（平成29年10月版）

---

特定非営利活動法人 日本スポーツボランティアネットワーク

〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル3F

TEL：03-6229-5620 FAX：03-6229-5621

URL：https://spovol.net E-mail：info@jsvn.or.jp

---

本テキストの内容を引用された場合、本書の引用であることを明記してください。